

---

# 私が雨を嫌う理由

並盛りライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私が雨を嫌う理由

### 【著者名】

Z4867J

並盛りライス

### 【あらすじ】

いつも雨の日は憂鬱で、なぜか気が滅入った。いつものように学校へ向かう朝、自分の名前を知る青年に会って、ある出来事を思い出す。私が雨を嫌う理由は。

今日の空は涙模様で、雲になりきれなかつた空が墮ちてきて、私を濡らしていく。

水溜まりに映つた影が像を結んで私自身を睨んでいた。

今日はきっと嫌な日になるぞ。と警告しているかのようだつた。傘を置んで、駅の階段を登つていくと、電車の遅れを伝えるアナウンスが流れてくる。

「またか」

「昨日も遅れたのにな」

そんな声が背後から聞こえてきた。

隣のサラリーマンの肩は濡れていて、私の靴下の片方もひどく濡れていた。

それでも私はグジュグジュと鳴る靴のままで改札を通り抜けた。ホームでは電車を待つてゐる人がいつもより多かつたので少し窮屈だつた。

私は傘が人に当たらないようになるべく小さくなつて立つてゐた。そんな事を気にしない人達は無意識にその傘を押し付けてくる。

「嫌だな」

電車に乗つてからもじばばくは、ジメジメとした湿氣と左脚の冷たさが不快だつた。

しばらくして、降りる駅につくと、私は逃げるように電車を降りた。

駅から学校までは歩いてすぐだけど、こんなに雨が降つていると億劫に感じる。

改札を出ると同じゼゼーの顔は知つてゐるけれど名前を知らない誰かがこつちを見ていた。

「倉岳さん、おはよつります」

「おはよう、いざります」

今まで声をかけられたことは無かったので、少し驚いた。

「先週の発表、すごかつたですね」

「はあ」

私は先週、発表をする機会があつて彼はその事を覚えていたようだ。

「たぶん、前回の発表では一番完成度が高かつたように思いますよ」

「そんな、たいしたことないですよ」

「とくに、終わりの所の持論が良かつた気がします」

「そうかな」

そんな風に話をしながら歩いていくと、すぐに教室についた。まだ、誰も来ていないので彼と世間話をしていた。

「ドイツ語のテストの成績、どうでした？」

「ぎりぎりで、落ちなかつたのが不思議な位だよ」

「そうですかあ」

その日は結局、出席したのは一人だけで、おまけに発表担当者が来なかつたので、先生の機嫌は最悪だつた。

やつぱりこんな雨の日に来るんじゃなかつた。

そう後悔し始めていた。

授業が終わる頃には、濡れていた靴下は乾いていて、雨も小降りに変わつていた。

次に授業があるというので、唯一授業に来た彼と別れて図書館へと向かつた。

とくに用事も無かつたが、せつかく学校に来たので勉強しようと思つたのだ。

図書館に入つて右奥のいつもの席が他の人に取られていたので、しかたなく一階へ向かつた。

すると、そちらもいっぱいで座る席が無かつた。

雨だから、いつもより多いのか。それともテストが近いのも原因の一つだらう。

私は荷物を持つたまま所在無く書庫をうろついていた。

居場所が無いのに私は何をしているんだろう。そんな風になんとか惨めになつた。

普段は見ない短歌の雑誌をパラパラと眺めていると、午前中にあつた彼の事を思い出した。

名前は何だつたかな。

そもそも私はいつ名乗つたんだろうか。

いつもなら気にしない事だつたが、なぜか気になつていた。

やつと座れる席を見つけた頃には授業が終わつており、お昼の時間になつていた。

私は構わずに、手提げ鞄を机に置いて、倒れ込んだ。

居場所を見つけたにも関わらず勉強する気にはなれなかつた。

私はノートを開けたり閉じたりしていたが、いつこうパンは進まない。

「また会いましたね」

私がだらし無く、机に倒れ込んでいると後ろには彼が立つていた。こんな端っこの席に居ても見つけ出すなんて目敏いな、とも思つた。

「どこか座れる所は無いかなと思つたんですけど、なかなか無いですね」

「ああ、雨だから」

「はい」

断る理由が無かつたので隣りの荷物を退けて座れるよつこした。

「ありがとう」やつこます」

「いえいえ、とこひで名乗つた事あつたかな」

すると彼はしばらくキヨトンとした顔をして、ひづり言つた。

「ああ、やつぱり覚えてなかつたみたいですね」

「すみません」

「いや、そうじゃないかと思つてたんですよ」

彼は鞄から何かを出す訳でもなく、ただ動きを止めて、私の方を見ていた。

「実は二回生の時に、倉岳さんから傘を借りたんですよ」

「え？ 本当に私ですか？」

「間違いですよ。たしかに倉岳さんでしたから。それで、傘を返しに行つたら要らないって言つから」

「全然、覚えてないよ」

事実、そんな記憶はなかった。この男はきっと誰かと勘違いしているに違いない。

「あの日も確かに、今田みたいに朝から雨が降つていて、私も傘を持つてきましたが、誰かに持つていつしまわられて、それで困つていたんです」

彼は昔の事を思い出しているようだった。

「そしたら倉岳さんが、傘ないなら使えつて渡してください」

彼が語る自分の姿はまるで自分じやないかのようだった。

「次の日に返そつと思つたら、雨が降つてないのに傘なんて要らな  
いってはつきり言われて」

「まあ、やうだらうな」

私が言つてはいたが、記憶にはない。

「それで倉岳さんの事はすつと覚えてました」

「なるほど、全く覚えてないや」

彼は残念そうな顔をしていた。

「あの日、倉岳さんはどうやつて帰つたのか、気になつていたんで  
す」

「そつにえれば、そつだね。一本傘を持つていた訳じやあるまいし」

そう言つて、ふと私はある事を思い出した。

そうだ、私はあの時、確かに一本の傘を持つていたのだ。

その日、私は授業が無かつたにも関わらず、学校に来ていた。

先輩が傘を持つていかなかつた事に気付いたからだ。

一つ年上の先輩は、その頃大学院の試験勉強に忙しく、夜も遅い事が多かつた。

別に義理があつた訳ではないが、電話で持ってきて欲しいと言わ  
れて持つていつた。

実はほんの少しだけ先輩に氣があつたけれど、それは憧れに近い  
感情だったので、あまり気にしないようにしていた。

そんな私の事を知つてか知らずか、先輩は私の事を上手く利用し  
可愛がつてくれていた。

それでいいと思つたし、それ以上の関係を望んだ事もなかつた。  
だから私は、本当に何も考えずに傘を持つて学校に向かつた。  
だが、先輩はいつまでたつても待ち合わせ場所には現れず、校門  
の前で誰かの車に乗つていつた。

私は傘を差しながら、もう一本の傘が濡れないように抱えていた  
のだ。

そんな事はすっかり忘れていた。

けれど雨の日が嫌いになつたのは、あの日濡れた靴下の不快感を  
今でもどこかで覚えていたからかもしれない。

次の日からも、私は何事もなかつたように先輩と接していたし、  
その事を思い出す事も無かつた。

けれど私は悲しかつた。そして淋しかつたのだ。

先輩は大学院の試験に落ちて、この町を去つていつた。最後にお  
別れ会をやつたが、あの日の事は思い出さなかつた。

「そうですか、あの傘にはそんな意味があつたんですね  
私はあまり私情を込めずにその日の事を話した。

「すつかり忘れていたなあ」

あまり良い思い出じやなかつた。でも何となく悪い氣はしなかつ  
た。

少なくとも理由なしに雨の日を嫌うよりはマシだろつ。

「あ、雨止んでますね」

見ると、図書館の天窓から日差しが降り注いでいた。  
「傘が要らなくなつたな」

私がそう言いつと、彼も頷いた。

「ところで、名前を聞いてもいいかな？」

「はい」

彼は何故か嬉しそうだった。やはり名前は聞いた事のない名前だつた。

これから雨の日は彼の事を思い出すだらう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4867j/>

---

私が雨を嫌う理由

2010年10月8日15時13分発行